

Title	校本『定家卿自歌合』： 二松学舎大学附属図書館竹清文庫蔵「廿四番哥合」翻刻付七本校異
Sub Title	
Author	小林, 一彦(Kobayashi, Kazuhiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.28 (1998. 9) ,p.56- 67
JaLC DOI	10.14991/002.19980900-0056
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980900-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

校本『定家卿自歌合』

——二松学舎大学附属図書館竹清文庫蔵「廿四番哥合」翻刻付七本校異——

小林 一彦

『定家卿自歌合』は、『定家卿百番自歌合』とは異なり、四十八首二十四番から成る歌合である。勝負付および判詞はなく、伝本には巻首に序を持つものが多い。早くから真作が疑われ、定家仮託の自歌合として現在に至っている^①。

小稿は『定家卿自歌合』の校本を提供すべく、現時点で比較的善本と考えられる二松学舎大学附属図書館竹清文庫蔵「廿四番歌合」(外題)の全文を翻刻紹介し、これに七本による校異を付したものである。

まず、披見し得た七本について書誌を記す。

二松学舎大学附属図書館竹清文庫蔵本

寛永二十年写

一帖〔略称「竹」〕

列帖装。朽葉色地菊花紋表紙(竪二五・五×横一八・二糶)。外題 左肩短冊型題簽「定家卿消息／廿四番哥合」(別筆)。表紙右下隅に「秋」(墨書)の一字あり。料紙、鳥の子(雲母引)。墨付全二丁。遊紙、前なし、後二丁。折数二折、第一折五枚、第二折七枚(但し第一折初二丁、第二折最終丁は各見返しに貼付)。内題なし。「定家卿消息」(『近代秀歌』遣送本。奥書「こ

れは承元の比鎌倉右大臣以仲章／朝臣哥を可詠やうを尋をくらるゝ／時民部卿定家所被注遣也云々)と合写。なお、第一折「定家卿消息」、第二折「廿四番哥合」と各折は各作品に対応している。「廿四番哥合」は墨付一二丁。序あり。序、和歌本文ともに每半葉一〇行。和歌一首二行書き。字面高さ約二・四糶。番数記載位置は高さを和歌に揃え、行を改め「左(右)」を略二字下げ、歌題はさらにそれより略二字分の空白を設けて記す。序と歌合本文との間の見開き、一一丁裏に三行散らし書きにて「烏帽子狩衣／著たる男／一人」、一二丁表のほぼ中央には「僧一人」と墨書。奥書は二二丁裏に「右一冊以細野図書頭為景／本書写校合畢于時／寛永廿年七月下旬」とやや大ぶりに墨書、書写奥書と認められる。印記は「二松学舎／大学附属／図書館印」(二丁オ、方朱)・「二松学舎大学図書館蔵書」(同、小長方朱)・「竹清・馬越文庫」(同、長方青)・「竹清蔵」(同、長方朱)・他一印「金華堂」と読むか(同、半円朱)、「金花園」(裏見返し、長方朱)、二二丁裏に一印(長方朱)擦消あり。表紙左上隅(見開き面では左右上隅となる)に水損の跡が残るが、文字の判読に障りはない。「金花園」の印

から、若山滋古の所蔵に帰した一時期があったらしい。

島原市立図書館松平文庫蔵本（松一三九・二七）

〔江戸前期〕写 一冊〔略称「松」〕

袋綴。縹色已繫地牡丹唐草文様空押表紙（竪二七・五×横一九・六糎）。外題、左肩短冊型白紙題簽「二十四番自歌合 作者不考」（別筆）。料紙、斐楮交漉紙。墨付全一丁。遊紙、前一丁、後なし。内題、「詞合」。序なし。每半葉八行、和歌一首二行書き。字面高さ約二一・二糎。番数記載位置は和歌本文行頭に揃え、改行し略一字下げにて「左（右）」、略一字空格を設け

歌題を記す。印記「尚舍源忠房」（最終一二丁ウ、長方青）、「文／庫」（同、楕円朱陰刻）。奥書なし。遊紙袋部分に「廿四番自詞合 一校畢」の紙片が挟み込まれている。

宮内庁書寮部蔵伝道見法親王筆本（一五五・一三三）

〔江戸初期〕写 一帖〔略称「書」〕

列帖装。表紙は松葉色地、中央に上下を分かって金繡横二線、上半分に若葉色で牡丹胡蝶を織り出した古裂（竪一六・二×横一五・七糎）。外題、表紙中央、布目斐紙に金泥を施した短冊型題簽「定家卿四十八首歌合」（別筆）。料紙、鳥の子。金泥にて蜘蛛・菊水・湍流・織草などの下絵を施し、あるいは白・藍で牡丹唐草・菊楓秋草などを具引きする。墨付全一五丁。遊紙、前一丁、後なし。前遊紙裏に朝倉茂入の極札「照高院殿道見親王定家卿／四拾八首之／哥合」貼付。折数二折、第一折四枚、第二折五枚（但し第一折初一丁、第二折最終丁は各見返し貼付）。内

題「四拾八首之歌合 定家卿」。序あり。序・歌合本文ともに每半葉七行。和歌一首二行書き。字面高さ約一三・五糎。番数の記載位置は和歌本文行頭に揃え、改行の後やはり行頭より「左（右）」、一字空格を設け歌題を記す。イ本校記一箇所あり、同筆。奥書なし。印記「図書／寮印」（巻首、方朱）。

伝承筆者の道見法親王（二六一二～七九）は後陽成天皇皇子。母は三位局（古市胤栄女）。聖護院門跡、園城寺長吏をつとめた。真筆か否かは審かでない。

内閣文庫蔵「賜蘆拾葉」所収本（二二七・一一）

天保三年、新見正路写 一冊〔略称「内」〕

袋綴。海老茶色無地の叢書用後表紙（竪二三・七×横一六・九糎）。外題、表紙左肩短冊型題簽「賜蘆拾葉 三十二」（別筆）。料紙、斐楮交漉紙（補修あり）。墨付全一二丁、遊紙なし。

扉題「定家物語」「定家卿自歌合入群書類從」「屏風哥十二首」「切目王子会和歌懷紙写」「阿仏作和哥抄物明融眞蹟写」。内題「定家物語」「四十八首之哥合 定家卿」「賀屏風十二首和詞」。全冊一筆書きである。「定家物語」は二丁表裏の一丁分しか残存せず、以下落丁。また、扉題に記された「切目王子会和歌懷紙写」「阿仏作和哥抄物明融眞蹟写」は、現在、当該冊中に存しない。印記「日本／政府／図書」（二丁オ・一二丁ウ、方朱）。「内閣／文庫」（二丁オ・八丁オ・一二丁ウ、方朱）。「浅草文庫」（二丁オ、長方朱）。

「四十八首之哥合」は墨付全七丁。序あり、序・和歌本文ともに每半葉九行、和歌一首一行。字面高さ約一八・〇糎。番数

記載位置略二字下げ、歌題はさらに大幅に位置を下げて撰集類の作者名に相当する辺りに記す。奥書「右一卷以古写本書写畢于時／天保壬辰四月朔日／源正路」（九丁ウ）。

賜蘆拾葉は第一集より第二集まで現存九五冊（元来は一二〇冊か）。幕臣新見正路（本姓「源」）が文政天保頃に書写・編集した叢書である。正路は蔵書家としても知られ、文庫名を賜蘆文庫と称した。將軍から御池の蘆の一葉を賜ったからとも、祖先の拝領した家紋が丸に蘆の形であつたからとも言う。

中野幸一氏蔵本

元禄十年、上村正敬写

一冊「略称「中」」

袋綴。灰汁色出繫地牡丹唐草文様空押表紙（竪二二・九×横一六・〇糎）。外題、左肩白紙短冊型題簽「定家卿四十八首哥あわせ／こせんひせつ三十二首和哥／たくあん百しゆの和哥」、中央打付書「定家／後撰秘説／たくあん」（別筆、後代）。本文共紙見返し剝落後、扉題、左肩打付書「定家卿四十八首うたあわせ／こせんひせつ三十二首和哥／たくあん百首の和哥」（外題の題簽と位置・字形を似せる。別筆、後代）。料紙、斐楮交漉紙。墨付全三三丁。遊紙、前一丁、後なし。内題「四拾八首哥合 定家卿」後撰秘説伝授歌且三拾二首「百首」。全冊一筆書き、三三丁表に「元禄十丑ノ年八月十二日写之 上村正敬」の書写奥書がある。印記「九曜文庫」（一丁オ、長方朱）。「中野／蔵書」（同、方朱）。

「四拾八首哥合」は墨付全七丁。字面高さ約一九・三糎。序あり。序・和歌本文ともに毎半葉九行、和歌一首一行書き。番

数記載位置略二字下げ、一字分空格後「左（右）」続けて歌題を記す。奥書「文亀元菊月上旬之天於徳生／庄櫃玉閑居之書写所也」（八丁オ）。文亀二年に為家自筆本を以て書写したという群書類従本の本文書を僅かながら遡る、最古の本奥書を持つ。

群書類従本 卷第二百二十所収 内閣文庫蔵本（二二四・三八）

一冊「略称「類」」

袋綴。赤香色布目表紙（竪二五・七×横一八・一糎）。外題、左肩単郭付短冊型白紙題簽「羣書類従二百廿」（刷）。料紙、楮紙。無辺無界、印面高さ約二〇・〇糎。版心、「卷二百二十」、下辺に丁付「一（六十八丁）」。遊紙、前一丁、後なし。第一丁（内題前に「羣書類従卷第二百廿／檢校保己一集／和調部七十五自歌合四」と刻書。内題、「後鳥羽院御自歌合嘉禄二年四月廿二日家隆卿賜之判連云々」四十八首詞合 定家「家隆卿百番自歌合」隆祐朝臣百番自歌合」。印記「太政官／文庫」（二丁オ、六八丁ウ、方朱）あり。また「記録局管／理大蔵省／図書之記」（大円朱）を「消印」にて消去する。

「四十八首詞合」は全八丁（九く十六）。序あり、序題は「定家卿自歌合」に作る。序・和歌本文ともに毎半葉一〇行、和歌一首一行に粹刻。奥書「為家卿自筆之以本書写畢／文亀二年臘月念二日 亥国在判／右定家卿卅八首自歌合一卷以浜田侯秘蔵古鈔本書写畢」。

東京大学国文学研究室蔵「歌合類纂」所収本（中古一一・一八）

〔江戸後期〕写

一冊「略称「東」」

袋綴。桑色無地表紙(豎二三・七×横一五・八纏)。外題、左肩短冊型題簽「歌合類纂 十」。料紙、斐楮交漉紙。墨付全一三二丁。遊紙、前なし、後一丁。内題「四十八首調合 定家」「家隆卿百番自歌合」「隆祐朝臣百番自歌合」「永福門院百番御自歌合」「慈照院殿御自哥合」「堯孝法印自哥合」「道堅法師自歌合」「豊原統秋自歌合」「十市遠忠自歌合 兵部少輔中原遠忠」「細川右京大夫自歌合」。印記「東京帝/国大学/図書印」(見返し、大印方朱)・「国文」(同、小印朱)・「中尾/藏書」(一丁才、方朱)。なお当該冊の小口書は「九」、第九卷(第九冊)のそれは「十」で、各々取違えて記す。

「四十八首調合」は墨付全六丁(二く七)。序あり、序題は「定家卿自歌合」に作る。序・和歌本文ともに每半葉一行、和歌一首一行書き。字面高さ約一八・四纏。奥書「為家卿自筆之以本書写畢/文亀二年臘月念二日 實国在判/右定家卿卽八首自歌合一巻以浜田侯移藏古鈔本書写畢」(七丁才)。

歌合類纂は全十巻十冊。「在民部卿家哥合」にはじまり「細川右京大夫自歌合」に至る、平安・鎌倉・室町時代成立の歌合、全一二四編を収載した叢書。編者未詳。全巻の内容はごく一部を除き群書類従巻第百八十(和歌部三十五^{歌合一})から巻第二百廿二(和歌部七十七^{自歌合六})に相当、そのほとんどを収録する。調査時は巻四を除く九冊を披見し得た。

以上七本の書誌的情報を踏まえつつ、大略諸本の本文上の特徴などを整理しておきたい。

まず松である。松は序を持たない。定家自身が制作の動機に

ついて語るといふ体裁を採る序は、作品を規制する上で重意味を有している。その序を欠く松には、当該作品を定家の自歌合であるとする明徴が窺えない。「調合」とのみ記す内題、さらに別筆ながら外題「二十四番自歌合^{作者不考}」は、作品がすでに何人の自歌合なのか判らなくなってしまうことを物語る。竹(底本)に対する異同87箇所中、各伝本が持つ異文の数は、東37、類33、松・中29、宮24、内18、書16であるが、独自異文に限れば松は20と突出しており、以下中12、書9、内8と続いている。松の独自異文には、歌題「杜郭公」の14番歌四句「行ぬに名のる」(諸本「またぬになのる」)や25番歌結句「松のさよひめ」(諸本「まつらさよひめ」)等、明らかに劣ると思われる例が少なからず見出せ、本文は良質とは言えない。

次に類・東・中・宮の四本である。類は独自異文を持たないが、それは類の異文がすべて東にも共通して見られるという事情による。例えば20番歌二句「月にわかるゝ」(諸本「風にわかるゝ」)は傍記に至るまで合致するなど、両者は極めて親密な関係にある。東の独自異文は4例だが、番数「一番」を「一首」と誤記、30番歌歌題「暮秋露」を誤脱、等々不注意による単純な誤りが目につき、本文は類に比して劣性である。一冊に合写された他の九作品にも末尾に群書類従所収本と同じ奥書が認められ、東は類の転写本であると推断される。類・東の両本のみに共通して見られる異文は14例、そのなかには「なには江」を詠じた13番歌の歌題を「河辺早夏」(諸本「海辺早夏」)とする誤りが含まれる。中は25番歌「行月の」(諸本「月の行く」)や45番歌結句「こゑの里く」(諸本「こゑくのさと」)等の

独自異文を持つ一方、必ずしも善良とは言えない本文も見受けられる。例えば14番歌三句「時雨」(諸本「ほとくす」)はおそらく「時鳥」の誤りであろうし、前後に月の結題が並ぶ20番歌の歌題「花前風」(諸本「月前風」)も誤写によるものである。類・東・中・宮の四本に見られる共通の異文は7例を数えるが、13番歌二句「あしの軒はの」(他本「あし屋の軒の」)、37番歌初句「いつはりに」(同「いたつらに」)や、宮の誤脱(ことなり―ことり)一箇所を除いて序の本文が完全に一致するなど、この四本は他本と対立する本文を共有している。類・東、さらに中および宮を加えたグループは、他の諸本に比してやや系統を異にする伝本群と位置づけられる。

書と内とは相互に特別に近い本文を持つとは言えないが、諸本43番歌初句「雲そうき」に対し両本とも「雲にうき」、同29番歌「うらのとまや」に対し「浦の芦屋」(書)「そのの蘆屋」(内)と共通性が見られる。また、直前の歌題を承ける場合、「題同」(竹)と「同題」(松・中・宮・類・東)の対立が看取されるが、書・内の両本は7番歌を「同題」、24・26番歌では「題同」とするなど、ともに統一性を欠いている。書の独自異文としては、序「是しるす」、28番歌結句「今夜よらん」、43番歌二句「色にみせぬ」等が指摘できるが、いずれも誤写誤脱に起因すると判断してよいであろう。内は17番四句「日のかけうつる」(諸本「日かけわたる」)など注意すべき独自異文を持つものの、惜しむらくは38番歌結句に欠脱が存在する。

最後に竹である。竹は唯一「烏帽子狩衣著たる男一人」「僧一人」の記述を持ち、際立った特徴が認められる。「又そのか

たちを画図にうつして左右にわかつ道俗ことなりといへとも愚身これひとつなり」という序の内容と深く関わるこの記述を、前稿(注1)拙論)において、竹を遡源する系統の本にかつて道俗二態の定家の姿を描いた「画図」が確かに存在していたことを物語る証拠であると指摘した。これに対し、川平ひとし氏は慎重な態度を示され、次のような可能性にも言及された。

むしろ逆に、竹清文庫本の記載を後出のものと考ええることもできよう。序の叙述を汲んで、後代のプソイド定家が進んで記入したという可能性もあるだろう。「其形」の解釈の問題に立ち戻つて言えば、事実「画図」に描かれたとして、それはすなわち定家その人の姿をかたどつたものと断じてよいかどうか、なお留保されてよいのではなからうか。(注1)川平氏論文)

しかしながら、後代の何者かが定家の自歌合らしく装うために記入したとすれば、像主が定家であることを知らしめるような記載内容でなくては意味をなさないように思われる。「烏帽子狩衣著たる男一人」「僧一人」以外に、より効果的な書き様は少なからず存したのであろう。序の内容を具現するとして、敢えてこのように記した必然性が観察し難い。同様に、「画図」の場合も定家その人の姿をかたどるよう腐心してこそ、効力を発揮するのではないか。竹を遡源する系統の祖本には画図が描かれており、絵を模写するのは和歌を書写するようにはいかないため、いつの時点かは判然としないものの、書写者がそれぞれ半葉を充て「烏帽子狩衣著たる男一人」「僧一人」と絵の現状を書き留めたと解す方が、蓋然性が高いのではないか。

竹の奥書に見える「細野圖書頭為景」とは藤原惺窩の長子にして、伯父為將の後継となり下冷泉家を嗣いだ為景(一六一二—五二)に違いない。寛永二十年(一六四三)には三十二歳で存命しており、その所持本を書写したのが竹ということになる。奥書は文字も大振り、本文と同じ大きさで書かれた「定家卿消息」の本奥書とは明らかに様相を異にし、さらに「廿四番歌合」末尾から半丁以上の空白を置き丁を替えて記されていた。奥書「右一冊……」は、為景所持本を丸々一冊写したように解せる。「廿四番歌合」(『定家卿自歌合』)は「定家卿消息」すなわち定家真作の歌論書『近代秀歌』と合綴されて定家子孫の手許に伝存していた可能性も窺え、「子孫のためにしてこれをする」という序の文言が改めて注視されることである。叙上のごとく、竹は甚だ注目すべき伝本とすることができよう。

『定家卿自歌合』は、中・宮および類・東の本奥書が示すとおり文亀(一五〇一—四)頃にはある程度流布していたと想像される。しかしながら、類が記す為家自筆本の存在となると俄には信じ難い⁵⁾。本奥書の古さでは中・宮・類が注意されるが、下冷泉家の歌字を受け継ぎ、後年家を再興するに至る為景所持本を親本とする竹は、その素性ととともに、道俗二態の画図が存在した痕跡を留め、かつ諸本に比して善良な本文を保持する。底本に相応しいと判断した所以である。

注

(1) 冷泉為臣編『藤原定家全歌集』(昭一五 文明社、昭四九再刊 国書刊行会)、『群書解題』(樋口芳麻呂氏執筆)、久保田淳氏「訳注

藤原定家全歌集』(昭六一 河出書房新社) など参照。稿者も諸先輩の驥尾に付して些かその真偽に論及したことがある(『定家と長明——定家卿自歌合』の真偽に及ぶ)(『藝文研究』六九 平七・一二)。また近時、川平ひとし氏によって序文の詳細な読みが提供された(『定家卿自歌合』箋註(一))(『跡見学園女子大学国文学科報』二五 平九・三)。「非定家を読むこと、すなわちそれは定家を読むことに他ならない」とされる氏の、作品世界の深層へと向かう読み込みは極めて魅力的であり、続稿が鶴首される。

(2) 追記 参照。

(3) 井上宗雄氏「叢書探訪② 賜廬拾葉」(『日本古典文学会々報』四二 昭五一・九) に詳しい。

(4) 『国書総目録』第十卷叢書目録、「和歌大辞典」当該項目(久保田淳氏執筆) 参照。

(5) 注(1)『群書解題』、川平氏論文に言及がある。

〔付記〕貴重な資料の翻刻を御許可いただいた二松学舎大学附属図書館および種々御配慮を忝なくした小林憲二氏はじめ館員の皆様、御所蔵本の閲覧調査に際し格別の御厚情を賜った中野幸一氏と御高配を頂戴した兼築信行氏、宮内庁書陵部・国立公文書館内閣文庫・島原市立図書館松平文庫・東京大学国文学研究室の各位に、記して深甚の謝意を表する。

〔追記〕校正段階で川平ひとし氏より宮城県図書館に一本(『詠歌大概』(他5種) [M911.1-H]) が存する旨を教示を得た。氏は稿者が校本作成中と存知されるや該本写真のコピーを直ちに御恵送下さり、急速校異を書き加える恩典に恵まれた(略称「宮」。奥書は「文亀元菊月上旬日之天於徳生／庄檀玉閑居之書写畢」)右以正本書写焉者也)宝曆癸未仲秋日／藤原博兼(花押)と読める。中野幸一氏蔵本と同系統か。また、平成十年度和歌文学会大会(於東洋大学) 図書展覧では新出の一本(伝飛鳥井宋世筆) が展示された。同本についても川平氏は私信にて御教示下さったが、詳細は他日を期したい。川平氏の御厚情に衷心より御礼申し上げます。

(こばやし かずひこ)

凡例

一、「定家卿自歌合」の校本である。

一、底本は二松学舎大学附属図書館竹清文庫蔵「廿四番哥合」

(外題)を用いた。

一、底本の翻刻にあたっては、原本の面影を残すべく努めた。

改行、番数・「右(左)」・歌題の位置は原本の通りである。

ただし、便宜上、以下のような処置を施した。

1、旧字・異体字等は原則として通行の字体に改めた。

2、丁数は漢数字を以て示し、各葉の表裏は「」により区別した。

3、和歌歌頭に連番を付した。

4、校異の当該箇所を明示するため右傍に「*」を付した。

一、校異は底本の翻刻に続き、「歌番号*底本文—対校本文」の形でこれを一括して後掲した(空格・欠字は「」で示した)。その際、以下の場合は原則として略に従った。

1、仮名の字母・漢字(同訓の別字を含む)の字体の別

例「川—河」「歌—哥・詞」「故寺—古寺」「中空—半天」

2、漢字・仮名の別 例「山—やま」

3、仮名遣いの別 例「むめ—うめ」「らむ—らん」

4、訓みが確定できない場合(「咲ぬ」など)を除く送り

仮名の有無 例「更—更に」

5、名詞と名詞をつなぐ「の」「か」の有無 例「箇中—

箱の内」「世中—世の中」「むめかえ—梅枝」

6、補入・見せ消し・重ね書きによる訂正文が底本のそ

れと一致する場合

7、踊り字(繰り返し記号)の異同

一、校合に用いた諸本とその略称は以下の通りである。

島原市立図書館松平文庫蔵本 (松)

宮内庁書寮部蔵伝道見法親王筆本 (書)

内閣文庫蔵「賜蘆拾葉」所収本 (内)

中野幸一氏蔵本 (中)

宮城県図書館蔵本 (宮)

群書類従本 卷第二百二十所収 内閣文庫蔵本 (類)

東京大学国文学研究室蔵「歌合類纂」所収本 (東)

同一異文が複数諸本にわたる場合は、掲出本文は初出の対校本の本文に依った。

なお、この他に序のみが「八洲文藻」にも収載されるが、完本である宮内庁書陵部蔵「八洲文藻」(四五二・七)によれば、本文は群書類従本のそれと一致する。

予少年のむかしより暮齡のいまに

いたるまで前後に詠するところの和哥

つもりて箇中のみてりしかれとも

口業の因縁となりて更身後の資糧

にあらず因茲今いさゝか滅罪生善の

はかりことをめくらさむかために愚詠

の中より四十八首の詠をぬきいて、

一卷の哥合とす又そのかたちを画図

にうつして左右にわかつ道俗ことなりと
いへとも愚身これひとつなり哥のかすを
四十八にきたむることは彼弥陀本願に
なすらへて撰取不捨のちかひなとたのむ
ゆへなり子孫のためにしてこれをするす
外人のためにしてこれなとするさすなかき
よのかたみにもちゐて反古にしよすること
なかれといふことしかり

(四行分空白)

(半丁分空白)

烏帽 子狩衣

著たる男

一人

僧 一人

一番

左 早春梅

1 はるさむきこすゑはゆきにうつもれて

* さかぬもまかふ軒のむめかえ

右 海辺霞

2 うら人のあしわけをふねこきいて、

さはるかたなくかすむはるか

二番

左 浦霞

3 あま人のたつるけふりはみえわかて
かすみにはるのもしほやきける

右 花似雪

4 時しらぬはなの雪ふるこのころは
よし野もふしの山とみえけり

三番

左 故寺花

5 かつらきやとよらのさくらさきにけり
かすみにしにかゝるしら雲

右 山路春行

6 すゑにみし雲をこゝろにわけとめて
はなにきたむる春のやまこえ

四番

左 題同

7 たつねいる山ちやふかくなりぬらむ
あとよりをくる花のした風

右 山家花

8 やまさとをさひしきものとおもひしは
花みぬほとこのゝろなりけり

五番

左 海上春望

9 とをしまの一木の松にゐるくもを
花かとみてやかかへるかりかね

右 河落花

10 おほる河みきはもしろくはなちれば
はるもかれたるあしのむらたち

六番

左 春夜雨

11 おほるなるならひをかこつ春のよの
あめさへかすむあり明のはて

右 三月尽

12 なこりなく心もつきてかなしきは
いまをかきりのいりあひの春

七番

左 海辺早夏

13 なには江やあし屋の軒のひまをなみ
ふかぬにしける夏はきにけり

右 杜郭公

14 みちのへのもりのこすゑのほとゝきす
またぬになるあめのたそかれ

八番

左 水郷夏望

15 夏なからこぼるとみえて月かけの
すゝしくゝたるうちの河ふね

右 夏草

16 庭しけきくさはのしたのみちたえて
とはぬ人めは夏もかれけり

九番

左 夕立

17 ゆふたちのむかはぬかたはみねはれて
日かけわけたる遠山のいろ

右 納涼

18 しけりあふ庭の木かけの夕つゆに
みさりし秋をさそふ風かな

十番

左 初秋

19 はつあきの雲間の山のおまそゝき
はるれはすゝしみか月のかけ

右 月前風

20 むらくもの風にわかるゝ山かつら
かけはなれてもすめる月かな

十一番

左 嵐吹月

21 ふきかへすあらしにさよやふけぬらん
くもにちかひてすめる月かけ

右 故郷月

22 あれわたる軒の板間につけもりて
月さへこけのころもきてけり

十二番

左 山路月

23 ふかきよに山ちの月のをくらすは
つらかりぬへきたひのそらかな

右 題同

24 をのつから山ちのすゑにわけいて、
月にむかへはあくる空かな

十三番

左 海辺月

25 月のゆくかきりもさらにしらなみの
まねきもとめぬまつらさよひめ

右 題同

26 いさり火のけふりきよみのうら風に
月より外はよるなみもなし

十四番

左 八月十五夜

27 さやかなる秋もこよひの中空に
くもをはみせぬ月のかけかな

右 九月十三夜

28 うきことをわすれてそみる秋の月
なみたのひまやこよひなるらん

十五番

左 海辺擗衣

29 ころもうつうらのとまやに秋ふけて
よさむになりぬやへのしほ風

右 暮秋露

30 行あきのお花か袖は月もなし
をのれそのこるつゆのほのく

十六番

左 冬山月

31 かさこしのみねたちのほるうき雲の
時雨のうへや月のかけはし

右 山初雪

32 さとまてはをくらぬ雲のとたえにて
とをやまはかりみゆるはつゆき

十七番

左 行路雪

33 ゆきなやみあらしにやとをかるもかく
ゐなのゝ雪のさむき夕くれ

右 旅宿雪

34 たひ人のかりねのところに雪つみて
たゝ一夜なる冬こもりかな

十八番

左 海辺雪

35 あとおしむならひもしらしふる雪の
つもらぬなみにうかふ舟人

右 窓雪

36 くれ竹のまとのひまもるやまかせに
人もあつめぬ雪のさむけさ

十九番

左 初逢恋

37 いたつらにすきは夢の日数にて
こよひそむかふ袖のおもかけ

右 旅宿夢

38 草枕ひとよのなこりあとたえて

「一六

「二七

あくるをいそくゆめの山こえ
廿番

左 寄月恋

39 うらみわひおもひたえにしそのころの
月にむかへはうかふおもかけ

右 月前述懐

40 しつかなるころのうちのあらましに
いくたひかみしさらしなの月

廿一番

左 夕待恋

41 まつほとはなくさむこともあるへきに
なみたゆるさぬわかゆふへかな

右 述懐

42 野も山もくるしきまてはたつねきぬ
たれにうき世のほかをとほまし

廿二番

左 冬恋

43 雲そうき色にはみせぬわかそても
しくると人にしられぬるかな

右 山路

44 いかにしてこゆへきみちの未なれば
雲にひとしき山のみゆらん

廿三番

左 暁別恋

45 しはしとものとめかたしやなくとりの

わかれをつくるこゑくのさと

右 山家

46 世中のうかりしやとおもふには
ふかきもあさき山のおくかな

廿四番

左 社頭鐘

47 今はともよほすかねのおとこやま
神代の月のあけかたの空

右 社頭松

48 神かきにみつのからみやをくるらん
くもゐの風のかよふ松かな

(二行分空白)

(半丁分空白)

右一冊以細野図書頭為景

本書写校合畢于時

寛永廿年七月下旬

校異

【序】—ナシ 【序題】ナシ—定家卿自歌合(類・東)

*前後に—前後(中・宮・類・東) *又—ナシ(中・宮・類・東)
*ことなり—ことり(宮) *かずを—数(類・東) *四十

八に―四拾八(書) *本願―至願(内) *なとたのむ―なと、
のむ(中) *外人のためにして―外人のために(中・宮・類・
東) *これなとるさす―これをしるさす(内) 是しるさす(書)

*烏帽子狩衣著たる男一人―ナシ(松・書・内・中・宮・類・
東) *僧一人―ナシ(松・書・内・中・宮・類・東)

【内題】ナシ―詞合(松) 四拾八首之歌合 定家卿(書・内)
四拾八首哥合 定家卿(中・宮) 四十八首詞合 定家(類・東)

*一番―一首(東)
1 *さむき―さむく(松) *さかぬも―咲ぬも(内) *まかふ
―まよふ(中) 2 *こき―つき(東) 3 *かすみに―霞そ

(松・書・内・宮・類・東) *やきける―たきけり(松) 4
*しらぬ―みえぬ(松) 6 *山路春行―山路旅行(類・東)

*すゑに―それと(松) *やまこえ―山踏(内) 7 *題同―
同題(松・書・内・中・宮・類・東) *をくる―おつる(松)

8 *やまさと―山まと(類・東) 9 *くもを―雲の(宮)
10 *はる―雲(松) 11 *ならひ―なからひ(書) *はて―

そら(松) 12 *春―かね(中・類・東) 13 *海辺早夏―河
辺早夏(類・東) *あし屋の軒―あしの軒は(中・宮・類・東)

*ふかぬに―ふかぬも(東) 14 *ほゝと―ときす―時雨(中) *
またぬ―行ぬ(松) 15 *こほる―氷(松・内) こゆる(類・

東) *すゝしくゝたる―すゝしくわたる(松) 16 *しけき―
しけみ(松) *かれけり―かれける(中) 17 *むかはぬ―む

かはむ(宮・類・東) *日かけわけたる―日のかけうつる(内)
18 *あふ―そふ(類・東) 19 *はつあきの―初秋を(中)

20 *月前風―花前風(中) *風に―月に(類・東) 21 *月

かけ―月かな(宮) 22 *故郷月―故郷(書) *板間に―板間
の(中・宮・類・東) 23 *ふかきよに―深る夜に(松) 深き

夜の(類・東) 24 *題同―同題(松・中・宮・類・東) 25
*月のゆく―行月の(中) *まつらさよひめ―松のさよひめ

(松) 26 *題同―同題(松・中・宮・類・東) *外は―外に
(松) 28 *わすれてそ―わすれても(中) *ひまや―ひまそ

(松) *なるらん―よるらん(書) 29 *うらのとまや―浦の
芦屋(書) そらの蘆屋(内) 30 *暮秋露―ナシ(東) *袖は

―すゑは(松) *月も―露も(松) 31 *かさこし―かせこし
(書) 風こし(松・内・中・宮・類・東) *うき雲の―うき雲

を(類・東) 32 *山初雪―初雪(中) *とたえにて―とたえ
して(松) 34 *一夜―ひとり(内) 35 *うかふ―かよふ

(松・書・内・中・宮・類・東) 36 *さむけさ―さむけさ
(中) 37 *いたつら―いつはり(中・宮・類・東) 38 *旅

宿夢―旅宿恋(類・東) *ゆめの山こえ―夢の「」へ空格
部分に朱の不審紙貼付(内) 39 *うかふ―うかむ(中・類・

東) うらむ(宮) 42 *くるしき―くるしき(宮) *たつね
きぬ―尋ぬへき(類・東) 43 *雲そ―雲に(書・内) 雲を

(宮) *色にはみせぬ―色にみせぬ(書) *しくる―したる
(中) *しられぬる―しらせぬる(内・類・東) 44 *雲に―

雲も(松) 45 *とゝめ―とまり(中・宮・類・東) *なくと
りの「」(宮) *こゑくゝのさと―こゑの里く(中)

47 *もよほす―もよふす(類・東) 48 *かよふ松かな―か
よふくれかな(書)